英詩に見られるナチュラリスト的視点

―― ドライデン、ポウプ、王立協会、蜜蜂 ――

福　本　宰　之

▶ Key Words

1. Dryden
2. Pope
3. The Royal Society
4. Bee

SUMMARY

Naturalistic Point of View in Poems: Dryden, Pope, the Royal Society, and Bees

Although poets like Dryden and Cowley were chosen as members of the Royal Society in its early days, they were not conversant with science. The former was expelled from the Society due to his failure to pay membership fees while the latter never attended a meeting. As a result, it might be supposed that the rise of scientific ideas crystallized in the foundation of the Society did not have an impact on their works. The Society's aim in promoting science was to understand the law of nature which the omnipotent God had ordained, and thereby contribute to the well-being of human beings. The means was through experimentation and a close observation of nature, the latter of which naturalists embraced most eagerly. They collected as many samples, whether animal or plant, as they could, and behavioral patterns or distinguishing features were identified. It has not been pointed out that literary men drew much inspiration from this inductive way of scientific research. They valued observing nature directly in the same way as naturalists did, and praised the practice as something to be followed. They also learnt of the most ideal objects for observation, which were small creatures like ants and bees.

初期の王立協会会員はIsaac Newtonらを除くと、必ずしも科学に造詣が深くなかったことは、しばしば指摘される。例えばJohn Dryden。彼が王立協会の創設時の会員に選ばれたのはよく知られているが、その後、協会に積極的にかかわった形跡はなく、会合にもほとんど出席しなかった。1666年には会費未納を理由に除名されている。詩人としては他にAbraham Cowleyも会員に選ばれたが、実状はドライデンと大差なかった。やはり協会の会合には一度も出席しなかったし、1661年には一応*A Proposition for the Advancement of Experimental Philosophy*というそれらしいタイトルの一文を物しているが、これとて“philosophical colledge”の設立を掲げた上で、その教員組織やカリキュラムについての提案を行っているだけで、特に専門的な知識を必要とする科学論文ではない。このように初期の王立協会には文士たちも会員に選ばれているものの、一見、協会の設立に象徴される新しい科学精神の勃興と同時代の文学との関連は薄いように思える。

王立協会が標榜した新しい科学とは、自然は一定不変の法則によって支配されており、実験と観察によってその法則を抽出し人類の幸福に役立てることを目的としていた。明らかに、その根底にあるのは「森羅万象には絶対者としての神の英知が表現されている」という考えである。当時、科学とは自然を統御する神の意匠を研究することに他ならず、それは“Science is the study of the works of God”というFrancis Baconの主張に端的に表されている。(もっとも、王立協会では神について議論することはタブーとなっていたようだが。)この考えが自然描写に影響を及ぼした例を、具体的なテキストの分析を通して考察した研究としては、その対象の広範さにおいてMaren-Sofie Røstvigの労作*The Happy Man*[(1)]を凌駕するものは未だ出ていない。但しこの書物は、あくまで自然の探求が、“happiness”の追求と同義として捉えられていく過程を論じたものであり、テキストの中にその発想を跡づけることを中心課題とした本稿のアプローチとは異なる。実際、王立協会会員としては周辺的存在であったドライデンの*Georgics*をはじめ、「自然の中に神の英知を読みとる」という新しい科学精神の影響は17世紀後半から18世紀にかけて、意外なほど多くの文学作品に霊感を与えている。と言っても、科学者ならぬ身の文士たちが重んじたのは実験ではなく、専ら観察の方であった。

本稿では王立協会会員ドライデンの*Georgics*及びその後継者たるAlexander Popeの作品を吟味し、そこに看取される当時の科学的発想の影響を跡づけ、二人の詩行を新しいコンテクストとの関連で捉え直す。またⅣ章ではさらにポウプを取り巻く文士たちを取り上げ、ドライデン、ポウプで確認した事例が決して二人に特殊なものではないことを証したい。

I

自然を直に観察し背後に横たわる一定不変の法則を抽出することは、この時期イギリスで大流行したナチュラル・ヒストリーの目指すところであった。その意味では、文士たちに霊感を与えたのは新しい科学精神の中でも特にナチュラル・ヒストリーにおける研究手順であったと限定できる。少し時代は下るが、イギリスでは、18世紀前半「ウォルポールの平和」のお陰で国外旅行の安全がある程度確保され、グランド・ツアーが盛んになった。また世紀半ばから後半にかけては、三度に渡るJames Cook(キャプテン・クック)による世界周航が行われる。こうした旅行者、冒険者たちの手により世界各地から様々な動植物の標本や珍品、財宝、がら

くたの類が一挙にイギリスにもたらされ、コーヒー・ハウスや貴族の邸宅で展示された。1753年に開館された大英博物館こそ、こうした標本収集熱の集大成であることは言をまたない。このように今まで見たこともない種々雑多な動植物の標本が集められると、それらをどのように配列すべきなのか、という疑問が沸いてくるのは自然な成り行きであろう。そして自然界にあるものを体系化し分類せんとする欲求こそ、学問としてのナチュラル・ヒストリーの根底に横たわるものであった(2)。つまりこの時期のナチュラル・ヒストリーは、屋外に出て膨大な数の標本を収集し、例えば動物の標本の場合なら、こっちのグループはえら呼吸、そっちは肺呼吸という具合に個々の標本を綿密に観察し、共通する法則性や規則性を見つけだすという手順を踏んでいた。

具体的にJohn Rayを例にとってみよう。特にレイを取り上げる理由は、後に「ナチュラル・ヒストリーの父」と呼ばれるほど、その手法がイギリスのナチュラル・ヒストリーに多大な影響を与えた学者であることと、ドライデンとほぼ同時代人であり、かつ同じケンブリッジのトリニティー・カレッジに籍を置いていた（但し両者に親交があったという記録はない。余談だがニュートンもトリニティー・カレッジの出身である）からである。レイはナチュラル・ヒストリーの中でも特に植物学に造詣が深く、実際自分の脚でケンブリッジ周辺やヨーロッパ大陸を駆け回って、植物のサンプルを採集した。以下はそんなレイが述べた言葉である。当時、自然を研究する上で、実地観察こそ理想の手法だと見なされていたことが了解出来る。

> Let it not suffice us to be Book-learned, to read what others have written, and to take upon trust more Falshood than Truth: but let us our selves examine things as we have opportunity, and converse with Nature as well as Books. (Ray 124)

あるいは、もっと分かり易い例としてニュートンが書物からではなく、実際に野外で木からリンゴが落ちるのを見て万有引力を発見した、という有名な逸話（真偽の程はともかく）を思い出しても良いだろう。これらと、*Georgics* におけるドライデンの次の言葉を比べてみよう。

> Happy the Man, who, studying Nature's Laws,
> Thro' known Effects can trace the secret Cause.
> (Dryden, *Poems* 2; Bk. 2, *lines* 698–699)

"studying Nature's Laws"（自然の法則を研究し）という言葉が、既に学問としての科学の勃興を想起させる。が、それ以上に「目に見える結果から隠された原因をたどられる者は幸せなり」という言葉は、正しく先に述べた研究者の理想と軌を一にする。木からリンゴが落ちるという目に見える結果（known Effects）から、万有引力という隠された原因（the secret Cause）をたどるという態度である。あるいは、このドライデンの詩行に、ニュートンによる *A Scheme for Establishing the Royal Society* の一節 "..., establishing [general Rules or Laws] by observations & experiments, & thence deducing the causes & effects of things." (qtd. in Hall 21) の影響を読みとることも可能であろう。この箇所に限らず、*Georgics* においてドライデンは「自然をよく観察せよ」というアドバイスを繰り返し行っている。例えば、"Observe the

daily Circle of the Sun," (Bk. 1, 571)、"But more than all, the setting Sun survey," (Bk. 1, 601)、"The Nature of their sev'ral Soils now see," (Bk. 2, 247) (underlines mine) という具合である[3]。

Ⅱ

テューダー朝とステュアート朝時代のイギリスにおいては、森羅万象は人間のために造られたとする考えが主流であり、全ての動物は人間に奉仕すべき存在であった。元々王立協会が動物研究を奨励したのも、それらがどういう形で人間に有用であるかを探るためであった。この場合、奉仕の内容は単なる労働力や毛皮、食肉の供給に留まらず、人間に有益な教訓や示唆を提示することも含んでいた。この考えは、17世紀から18世紀にかけてより具体的に「人間が営む社会や政治のお手本を動物界に仰ぐ」という流行を生み出し、ステュアート朝の頃には、特に蜜蜂の社会こそ人間が見習うべき理想の社会と見なされた[4]。元々、蜜蜂については、その知恵や社会性が Aristotle の *History of Animals* や Pliny の *Natural History* において、とりわけ多くの紙面を割いて讃えられていた[5]。イギリスにおいては、William Shakespeare の *Henry V* 1幕2場においてカンタベリー大司教が "...For so work the honey-bees, / Creatures that by a rule in nature teach / The act of order to a peopled kingdom." (187–189) と述べ、蜜蜂の知恵を称えているし、*Georgics* が出版された頃に書かれた Jonathan Swift の *The Battle of the Books* では蜜蜂は近代派の象徴として祭り上げられており、そこで語られる "...by an universal Range, with long Search, much Study, true Judgment, and Distinction of Things, brings home Honey and Wax." (Swift 1; 150) という蜜蜂自身の言葉には、伝統的な蜜蜂観が表れている[6]。なぜ蜜蜂が人間のお手本として特に珍重されたのかというと、その理由は明白である。つまり、蜜蜂が女王蜂を戴く君主制を採っていたからであり、そのお陰で当時のイギリス人にとって、自分たちの世界と蜜蜂の世界との間にパラレルな関係を設定することが容易であったからである。蜜蜂が女王蜂を戴く君主制を採っていたから、人間のお手本としてもてはやされたのだとすれば、蜜蜂の世界から学び取るべきだ、と声高に叫ばれた教訓の多くが政治や政体に関するものであったことは容易に合点がいく。そしてこのような蜜蜂礼賛の言説が「自然をよく観察せよ」という詩人のナチュラリスト的視点から再提示されているのが *Georgics* ではないだろうか。実はこの詩の第4巻が養蜂すなわち蜜蜂について解説したものなのだが、議論の都合上、その前に蜜蜂礼賛の伝統を、そのタイトルからして最も忠実に反映している Bernard Mandeville の作品 *The Fable of the Bees*[7] の中に置かれた短詩 *The Grumbling Hive: or Knaves Turn'd Honest* からの引用を先に見ておく。

> THESE Insects liv'd like Men, and all
> Our Actions they perform'd in small:
> (Stanza 2)

引用冒頭にある "THESE Insects" とは蜜蜂を指す。彼らが「人間のように暮らし、人間の行為を全てミニチュア版で実践した」という言葉は、ドライデンの *Georgics* 第4巻を読み解く鍵となる[8]。例えばドライデンの *Georgics* には次のような一節がある。参考までに、Virgil の

原文も併記しておく。

But if intestine Broils allarm the Hive,
(For two Pretenders oft for Empire strive)
The Vulgar in divided Factions jar;
And murm'ring Sounds proclaim the Civil War.
(Bk. 4, 92–95)

Sin autem ad pugnam exierint – nam saepe duobus
regibus incessit magno discordia motu;
continuoque animos vulgi et trepidantia bello
corda licet longe praesciscere:
(*Virgil: the Georgics* Bk. 4, *lines* 67–70)[9]

両者を読み比べてすぐに気づくのは、原文では争い自体への言及はあっても、はっきり「内輪もめ、内乱」(intestine Broils, Civil War) とは書かれていない点である。つまり、「内輪もめ、内乱」や「民衆が派閥に分かれて言い争う」という話は、ドライデンが原文に手を加えて付け足したものであり、1690年代当時の国内の王位継承問題に対するドライデンの暗喩が見てとれる[10]。つまりマンデヴィルの「蜜蜂は人間の行為を全てミニチュア版で実践した」という言葉をドライデンは先取りし、政治風刺として利用しているのである。

ドライデンは、*Georgics* の別の箇所においても蜜蜂の社会と人間社会にパラレルな関係を想定し、蜜蜂の生態をよく観察することの重要性を説いている。やはり当該箇所とヴァージルの原文を併記しておく。

But since they share with Man one common Fate,
In Health and Sickness, and in Turns of State;
Observe the Symptoms when they fall away,
And languish with insensible Decay.
(Bk. 4, 366–369)

Si vero, quoniam casus apibus quoque nostros
vita tulit, tristi languebunt corpora morbo –
quod iam non dubiis poteris cognoscere signis:
(Bk. 4, 251–253)

ドライデンの方の1行目の“they”はやはり蜜蜂を指す。ここも両者を比較すると、原文にはドライデン訳の“in Turns of State”(国家の転機において) に相当する箇所がないことに気づく。また3行目で「(蜜蜂が病気で元気がない時は) 見逃しようのない兆しでそれとわかる」(non dubiis poteris cognoscere signis) とヴァージルが書いているのに対し、ドライデンは「(蜜蜂

たちの示す）兆候を観察せよ」（Observe the Symptoms）という命令文に訳している。先ほどの理屈と同じで、ドライデンはわざわざ原文に手を加えて「国家の転機においても蜜蜂は人間と共通の運命を背負っており、だからこそ蜜蜂をしっかり観察しなさい」と主張しているのである。先に触れた、蜜蜂の王位継承争いに託して、実は人間社会のそれをほのめかしているという解釈を、ドライデン自身が保証してくれる箇所である。この辺りのドライデンの主張は正に、

Induc'd by such Examples, some have taught
That Bees have Portions of Etherial Thought:
(Bk. 4, 321-322)

の2行に集約されている、と言えよう。

Ⅲ

Alexander Pope の *The Dunciad* が、同時代の衒学を笑い物にしようという目論みで設立されたスクリブレルス・クラブの所産であるのは言うまでもない。彼はその第4巻570行目において“F.R.S”（= Fellow of the Royal Society）という略語を持ち出し、王立協会を風刺している。またこれほど露骨ではなくても、この詩の第4巻には協会に対する揶揄が散見される。例えば“weeds and shells fantastic”を頭に戴き、“A Nest, a Toad, a Fungus, or a Flow'r”（Pope 5; Bk. 4, *lines* 398-400）を携えて愚鈍の女神に伺候せんとする一団が描かれているが、これは王立協会の根幹を成していた自然界の珍品蒐集家としてのヴァーチュオーソウたちを視野に置いている。そう言えば、レイもまた植物蒐集家であったことは前述の通りである。またポウプは同じクラブの会員である John Gay と John Arbuthnot の三人で *Three Hours after Marriage* という喜劇を書いているが、やはり主人公の医者 Fossile（もちろん「化石」という意味を響かせている）を世知に欠ける珍品蒐集家として観客に提示した上で、結局新妻に結婚後三時間で逃げられてしまうという落ちを付けているし、クラブの所産である架空の人物の回想録 *The Memoirs of Martinus Scriblerus* においても、主人公の父親 Cornelius Scriblerus のミイラ蒐集に託して、王立協会の活動を揶揄している。（なおミイラは *Three Hours after Marriage* においても話の展開上重要な小道具として使われている。）もちろんスウィフトの *Gulliver's Travels* 第3部で描かれているラガード学士院での珍妙な実験、発明も同工異曲である。

このように、ポウプはヴァーチュオーソウたちの珍品蒐集活動に対し、終始その偏執狂ぶりをあざ笑うかのような態度をとっており、それは彼が属するスクリブレルス・クラブの他の会員たちと共有する戦略でもあった。しかし、だからと言って王立協会が標榜する新しい科学精神に彼らが全く刺激されなかったと考えるのは早計であろう。現に *Three Hours after Marriage* の共作者アーバスノットは、他ならぬ F.R.S. であったし、ポウプの *An Essay on Man* 第3書簡の次の一節にも、そのナチュラリスト的視点は表れている。

Thus then to Man the voice of Nature spake—

"Go, from the Creatures thy instructions take:
・・・・・・・・・・・・・
"Learn each small People's genius, policies,
"The Ant's republic, and the realm of Bees;
(Pope 3-i; Ep. 3, 171-172, 183-184)

この詩行が既に見たドライデンの場合と同じく、蜜蜂を観察することにより、自然界に込められた神の英知を読み解くよう説いていることは明らかであろう。但し、蜂と同じように、アリにも女王アリなる存在がいるそうで、ポウプの「アリの共和制」という言葉は正確ではないようだ。(なお"Lab'ring Ant"をお手本にするという考え方は、ドライデンによるJuvenalの第6風刺の模倣詩477行目以下にも見られる。)また初期の作品*Windsor-Forest*の冒頭近くでは、森の姿を

... as the World, harmoniously confus'd:
Where Order in Variety we see,
And where, tho' all things differ, all agree.
(Pope 1; 14-16)

とポウプは描き、一見無秩序に思える森の自然でも、微細に観察すれば、そこにはちゃんと"Order"が存在している様を歌っている。彼のこの自然観には、一見無秩序に思えるこの世界も、きちんと神の意匠に沿った数学的法則によって支配されているのだという、ニュートンの主張と相通じるものがある。実際、直後の17から28行目で詩人は微細な自然観察を実践してみせている。(同じ微細な自然観察は、それぞれキジと川魚の姿態を描いた115から118行目、141から146行目でも実践されている。)そして、本稿の主題から逸脱するので詳述はしないが、"Variety"の中に"Order"が存する、という自然から授かった教訓が、ポウプの世界観やヘロイック・カプレットを駆使する彼の詩形に活かされている[11]。

先のレイの引用を読み直すと、「自然を直接観察せよ」というメッセージ以外に、もう一つbook-learnedに対する批判が見て取れる。元々、王立協会のモットーは"Nullius in verba"(直訳すれば"on the words of no one"「誰の言葉にも依拠しない」)であり、書斎に引きこもっての読書を、その理想とする研究態度—野に出て自然を観察すること—の対極として捉えていた[12]。カウリーも前掲の*Proposition*の序文で"the solitary and unactive Contemplation of Nature, by the most ingenious Persons living, in their own private Studies"[13]を無益なものと断じている。研究者に対する「書物を捨て」「自然を直接観察せよ」というこの二つのメッセージは、一対のセットとして、一見科学とは縁が薄いように思えるHenry Fieldingの*Tom Jones*[14]や、後に見るようにゲイやWilliam Cowperの詩行に取り込まれている。他方*The Dunciad*で衒学風刺のスローガンとして全編で繰り返される「書物を捨てよ」という呼び掛けにも、実はこのナチュラリスト的態度の残響を聞くことができる。作品で嘲笑されているdunceたちは様々に定義出来るだろうが、最も包括的なのはOEDが与える"One whose study of books has left him dull and stupid, or imparted no liberal education"であろう。(この意味の

用例として、OEDでは実際 *The Dunciad* 第4巻90行目が引用されている。）また第3巻では、暗い書庫の中で一心不乱にテキストを読み耽る注釈者が“Wits, who like owls, see only in the dark, / A Lumberhouse of books in ev'ry head,”（192–193）と評され、揶揄の対象となっている。続く第4巻に登場する二人の愚物、ウェストミンスター校の校長 Richard Busby が開陳する教育論“....Since Man from beast by Words is known, / Words are Man's province, Words we teach alone.”（149–150）と古典注解学者 Richard Bentley の言葉“'Tis true, on Words is still our whole debate,”（219）も、協会の掲げたモットー“Nullius in verba”を真っ向から否定するものである。John Henry は、修辞学を重視する教育カリキュラムが、17世紀の大学が科学革命に貢献するのを妨げ、ベーコンや Robert Boyle らの批判の的となっていた事実を指摘している（Henry 48）。この指摘を並置すると、*The Dunciad* におけるポウプの言葉を重視する教育カリキュラムに対する揶揄も、従来の如く単なる衒学風刺として片づけられるべき問題ではなく、そこには全く別の伏線があったことに気づく。

このように、新しい科学精神に対するポウプの態度は、本人が意識していたかどうかは別にして、アンビヴァレントなものにならざるを得ない。当時協会の Gresham College は世界中で採集された標本の集積地であった。ポウプがこうしたヴァーチュオーソウたちの珍品蒐集癖を嘲笑していることは、先に見た通りである。実際に、ポウプが子供の頃に煩った病気故に屋外で運動することもままならず、部屋に閉じこもりがちな本の虫であったことは、彼自身や腹違いの姉 Magdalen Rackett が証言している通りである（Spence 1; 6, 11, 13）。ところがその一方で、書物からではなく、屋外で自然を直に観察することで得られる神の英知を多とする点では、ポウプも協会の標榜する新しい科学精神と無縁ではなかった。おそらく、Samuel Johnson が *Life of Pope* の中で次のような指摘を行っているのも、その辺りの矛盾をふまえてのものだろう。曰く“[Pope] made the universe his favourite volume. He gathered his notions fresh from reality, not from the copies of authors, but the originals of Nature. Yet there is no reason to believe that literature ever lost his esteem;...”（Johnson 4; 62）

IV

他のスクリブレリアンについてはどうであろうか。まずスウィフトだが、そのナチュラリスト的視点は意外なところに表れている。先に触れた *Gulliver's Travels* の第2部においてBrobdingnag の国王は、体の小さいガリバーが自分たちと同じ所業をミニチュア版で行っているのを見て“...,how contemptible a Thing was human Grandeur, which could be mimicked by such diminutive Insects...”（Swift 11; 107）と嘆く。一方、ガリバーは自分たちの国では“...the tallest Persons were usually least provided with [reason].”（127）と反論し、その実例として蜜蜂とアリの勤勉、技芸、知恵深さを持ち出す。国王はメモを取りながらガリバーにあれこれ質問し、一応矮小な人間たちから学ぼうとするが、ガリバーが火薬と大砲の効用について語るに及び、彼を再び「昆虫」に喩え（“so impotent and groveling an Insect ”[134]）、ガリバーの不興を買う。この二人のやりとりには、先に *Georgics* 第4巻で検証したような、蜜蜂に学べという教訓が反転された形で実践されている。

またゲイについては、1727年に出た彼の*Fables*の Introduction として羊飼いと学者の問答

が置かれているのだが、そのやりとりも、既に見たドライデンや盟友ポウプの姿勢を彷彿とさせる。まず、学者が“Whence is thy learning? Hath thy toil / O'er books consum'd the midnight oil?”（*Poetry and Prose* 2 ; *lines* 15–16）と訊ねるのに対し、羊飼いは“The little knowledge, I have gain'd, / Was all from simple nature drain'd;”（33–34）と答え、書物からではなく、自然から直に学んだことを告げる。さらに、より具体的に“The daily labours of the bee / Awake my soul to industry. / Who can observe the careful ant, / And not provide for future want?”（37–40）と述べ、蜜蜂とアリの知恵から裨益されたことを伝える。言うまでもなく、この取り合わせはポウプやスウィフトが用いていたものと同じである。最後に、羊飼いの才徳に感じ入った学者が“Books as affected are as men, / But he who studys nature's laws / From certain truth his maxims draws,”（76–78）と述べ、書物の無益さと、ドライデンの如く、自然の法則を学ぶ重要性を説く。

さてこれまで述べてきたナチュラリスト的視点は、何も18世紀前半の作家にのみ霊感を与えてきたわけではない。以下に挙げるのは1785年に出版されたクーパーの*The Task* 第6巻からの引用である。

> Knowledge is proud that he has learn'd so much,
> Wisdom is humble that he knows no more.
> Books are not seldom talismans and spells
> By which the magic art of shrewder wits
> Holds an unthinking multitude enthrall'd.
> . . . . . .
> But trees, and rivulets whose rapid course
> Defies the check of winter, haunts of deer,
> And sheep-walks populous with bleating lambs,
> And lanes in which the primrose 'ere her time
> Peeps through the moss that cloaths the hawthorn root,
> Deceive no student....
>
> （*lines* 96–100, 109–114）

前半においてクーパーは「知識」と「知恵」を峻別した上で、書物からのみ学ぶ弊を指摘している。後半部は構文が少し複雑であるが、最終行の“Deceive”の主語は、その前に列挙されている“trees”、“rivulets”、“haunts of deer”、“sheep-walks”、“lanes”である。従って、骨組みだけを取り出すと「木々や、小川、鹿の出入りする場所、牧羊場、そして小道は如何なる学徒も欺かない」となり、その意味は必ずしも判然としない。ところが、既に検証した世紀前半の作家たちの「書物を捨て、自然を直接観察せよ」というナチュラリスト的姿勢を念頭に置けば、なぜクーパーが書物を退けた後「しかし自然は欺かない」とわざわざ断っているのか、一見不可解な詩行の意味も自ずから明らかになってくる。また同じ巻の中でクーパーは、我々人間が、蜜蜂ではないが四つ足獣から教訓を得られると言う。

But learn we might, if not too proud to stoop
To quadrupede instructors, many a good
And useful quality, and virtue too,
Rarely exemplified among ourselves.
(621–624)

これも先にドライデン、ポウプ、ゲイからの引用で検証したナチュラリスト的伝統に連なる視点であることは言をまたない。

V

王立協会とドライデンの関連については、Louis I. Bredvold が、会員たるドライデンがどれほど科学に造詣があったかは定かではないが、彼が新しい科学の流行によって引き起こされる知的な衝撃に鈍感であったはずはないし、王立協会にも関心を抱き、その精神を理解し共感も覚えた、と述べている（Bredvold 314, 333–4）。当を得た指摘であろう。Charles Ward 編のドライデン書簡集を読んでも、王立協会や科学の話題は皆無だが[15]、*The Dedication of the Georgics* において“Eden *was not made for Beasts,...but for their Master, who studied God in the Works of his Creation.*”（*Poems* 2; 917）と述べているドライデンは既にナチュラリスト的発想の下地を充分備えていた。実際 *Georgics* 第4巻の蜜蜂の描写には、ナチュラリストとしての視点が見られる。ナチュラル・ヒストリーの研究手法とは「野に出て自然を直に観察すること」であり、経験を重視した。II章で見たように、ドライデンもまた蜜蜂をよく観察し、そこから教訓を学びとろうとする。無論、蜜蜂をお手本とせよ、というメッセージはヴァージルの原詩の中に既に込められているのであり、ドライデンはそれを英訳しただけ、と片づけることも出来よう。この点に関して、ドライデンはやはり先の *The Dedication* において Earl of Chesterfield の reticence をヴァージルのそれに喩えて“*I must confess the Criticks made it one of* Virgil's *Beauties, that having said what he thought convenient, he always left somewhat for the imagination of his Readers to supply:...*”（914）と述べている。英訳の過程で原詩にない語句を付け加えたドライデンは、ナチュラリスト的視点からヴァージルが言い残した“somewhat”を補ってみせたのである。

この視点は、世紀をまたいでポウプにも受け継がれている。あらゆる意味で彼はドライデンの後継者の資格を備えていた。例えばポウプは *The Dunciad* の第4巻において、Samuel Clarke らしき人物に

We nobly take the high Priori Road,
And reason downward, till we doubt of God:
(471–472)

と述べさせ、先験的な思考法を揶揄している。詩人のこの立場を念頭に置けば、*The Dunciad* の中で彼が実体験から遊離し書物を読み耽る者を愚物と呼び、その衒学を執拗に攻撃した訳も

説明がつく。但しポウプの場合、王立協会が担う野外での標本収集活動が自らが属していたスクリブレルス・クラブの風刺の標的となった、という事情があり、その風刺の矛先は必ずしも一定ではない。一方、そのポウプやドライデンといった詩人たちが、観察すべき自然として特に引き合いに出したのが、先述の通り、蜜蜂やアリといった小動物である。文士であると同時に、*An History of the Earth, and Animated Nature* という全8巻の大作を著したナチュラリストでもあった Oliver Goldsmith は、その名も *The Bee* という随筆集の中の "The Sagacity of Some Insects" という記事で、蜜蜂やアリの勤勉さがナチュラリストたちの注目と称賛の的であったと伝えている（Goldsmith 1; 423)。文学とナチュラル・ヒストリーは、自然観察という手法のみならず、観察対象をも共有していたのである。詩人とナチュラリストは共に、II章末尾で引用したドライデンの言葉を再び借りれば "Etherial Thought"（神意）を、件の小動物に看取しようとしたのである。

17、18世紀の詩人たちの発想に、1660年の王立協会の創立と、結果としてのナチュラル・ヒストリーの興隆が、色濃く影を落としていることはこれまであまり顧慮されなかった。実際にはその影響は意外なほど広範で、深い。

注

＊本稿は2002年5月25、26日に開催された第74回日本英文学会年次大会（於：北星学園大学）におけるシンポジア第二部門「英米文学のナチュラル・ヒストリー」での口頭発表に大幅な加筆修正を施したものである。

（1） 書名は Horace のオードに登場する "beatus ille" から取ったもの。17、8世紀英文学において、如何にこの "happy man" という言葉が文学的トポスとして作品の中に取り込まれていたかを考察したもの。後出のドライデン訳 *Georgics* の "Happy the Man..." で始まる一節もその一例である。

（2） このような欲求が昂じて、森羅万象の事物や知識を体系付けようという動きとなり、百科事典という形で結実した。まずイギリスで1728年に Ephraim Chambers 編纂のものが出版され、この事典のフランス語訳の影響の下、世紀後半大陸で『百科全書』が生み出された。また1771年には William Smellie の手により *Encyclopaedia Britannica* の初版が出たが、スメリーもまたナチュラリストであった。

（3） 他にも、Bk. I, 459–460 や 514–515 を参照。

（4） Keith Thomas, *Man and the Natural World* I, II 章参照。

（5） 例えば、*History of Animals* 第5巻21、22章及び第8巻40章、*Natural History* 第11巻4章から12章、16章から23章を参照。

（6） 昆虫が比喩として文学の中でどのように利用されてきたかを考察した最近の研究としては Cristopher Hollingsworth, *Poetics of the Hive: The Insect Metaphor in Literature* がある。なおこの書物の41頁において、筆者は西欧における昆虫社会礼賛の起源を Plato の *Republic* にまで遡っている。

（7） ここで注意すべきは、fable（寓話）というジャンルである。fable の定義としては、Samuel Johnson が『英語辞典』で与えている "A feigned story intended to enforce some moral precept" が要を得たものであろう。つまり、fable においては、あくまで伝えたい教訓が先にあって、その目的に適うように話の筋を自由に展開することが許される。動物寓話を例にとれば、猫にネズミと対話させる、犬に楽器を演奏させる等である。この点、ありのままの自然を虚心坦懐に観察し、そこに表された神の英知を読みとる態度とは、対極にある。王立協会も、その学問的な態度として "Knowledge of *Nature*" と "Delightful Deceit of *Fables*" を区別するよう戒めていた（Sprat 62)。カウリーの *The Country Mouse*（これはホラースの第2巻第6風刺詩の末尾で語られている動物寓話の翻案で、同じ題材をポウプも扱っている）やドライデンの *The Hind and the Panther* が新しい科学精神を反映した産物とは呼べないのは、こうした理由によ

る。ましてや、fable をそのタイトルに謳うマンデヴィルの『蜜蜂の寓話』にナチュラリスト的姿勢を見るのは異論があろう。但し、この作品に蜜蜂礼賛の伝統が反映されているのは間違いない。同じことは、既出のスウィフトの *The Battle of the Books* にも当てはまる。また本稿の後半で John Gay の *Fables* を扱っているが、確かにこの作品の本体はジョンソンが定義する意味での寓話であり、やはりナチュラリスト的視点を跡づけるのは無理がある。だが、Introduction に限って言えば、「学識が深いはずの学者が、無学なはずの羊飼いに教えられる」という架空の設定自体が、ジョンソンの言う“A feigned story”にあたり、寓話を寓話たらしめている要素なのである。一方、そこに登場する蜜蜂やアリは現実にはあり得ない振る舞いをするわけではなく、羊飼いが語る内容については“A feigned story”とは言えない。つまり外枠において寓話という形式をとりながらも、「ありのままの自然を観察する」効用が説かれているのである。

(8) なおこの辺りの議論は、拙論「『ウィンザーの森』における“to follow Nature”の意義について」を参照。

(9) ラテン語の原文について、敢えて Loeb 版に依拠しなかったのは、Elliot が編んだ版の方がドライデンが見たラテン語のテキストに忠実と判断されるからである。詳しくは同書Introduction IV を参照のこと。

(10) William Frost はこの引用直後の137から151行目に付した注で、この辺りで描かれている２匹の蜜蜂の権力争いを James II、William III のそれに対する言及と読める可能性を示唆している。(Dryden, *Works* 6; 935–936)

(11) この教訓が詩人の世界観に及ぼした影響については Wasserman 101–168 に詳しい。また Brower 250 も参照。

(12) “'Tis true, that *Knowledge*, which is only founded on Thoughts and Words, has seldom any other end, but the *breeding* and *increasing* of more Thoughts and Words:...” (Sprat 336)

(13) Cowley, *Proposition*; Preface (n. pag.) において。また同じく血液循環論を唱えた William Harvey に宛てた *Ode: Upon Dr Harvey* において、

> [Harvey] ...wisely thought 'twas fit
> Not to read comments only upon [Truth's own book],
> But on th' original itself to look.
> (*Selected Poems of Cowley, Waller and Oldham*; *lines* 56–58)

と述べ、実地観察を重んじた学者の態度を称賛している。

(14) 第９巻の冒頭に、次のような一節が置かれている。

Again, there is another Sort of Knowledge beyond the Power of Learning to bestow, and this is to be had by Conversation. So necessary is this to the understanding the Characters of Men, that none are more ignorant of them than those learned Pedants, whose Lives have been entirely consumed in Colleges, and among Books: For however exquisitely Human Nature may have been described by Writers, the true practical System can be learnt only in the World. Indeed the like happens in every other Kind of Knowledge. Neither Physic, nor Law, are to be practically known from Books. Nay, the Farmer, the Planter, the Gardener, must perfect by Experience what he hath acquired the Rudiments of by Reading. How accurately soever the ingenious Mr. *Miller* may have described the Plant, he himself would advise his Disciple to see it in the Garden. (Fielding 1; 492–493, underlines mine)

なお、引用末尾で実地観察の重要さを説く“Mr. Miller”という人物に言及されているが、この人はフルネームを Philip Miller といい、当時著名な庭師であり、王立協会の会員でもあった。

(15) ただしドライデンの書簡は、編者自身も認めているように、大部分が散逸しており、この版にしてもわずか77編（うち15編はドライデン宛のもの）を収めるに過ぎない。

WORKS CITED

Allen, David Elliston. *The Naturalist in Britain: A Social History*. Princeton: Princeton UP, 1994.

Aristotle. *Aristotle: History of Animals*. Trans. A.L. Peck and D.M. Balme. 3 vols. Loeb Classical Library. Cambridge and Massachusetts: Harvard UP; London: William Heinemann, 1965–91.

Arthos, John. *The Language of Natural Description in Eighteenth-Century Poetry*. New York: Octagon Books, 1966.

Bredvold, Louis I. "Dryden, Hobbes, and the Royal Society" Ed. H.T. Swedenberg, Jr. *Essential Articles for the Study of John Dryden*. Hamden: Archon Books, 1966. 314–40.

Brower, Reuben A. *Alexander Pope: the Poetry of Allusion*. Oxford: Clarendon Press, 1959.

Cowley, Abraham. *A Proposition for the Advancement of Experimental Philosophy*. 1661. Menston: The Scolar Press, 1969.

Cowley, Abraham, Edmund Waller, and John Oldham. *Selected Poems of Abraham Cowley, Edmund Waller and John Oldham*. Ed. Julia Griffin. Harmondsworth: Penguin Books, 1998.

Cowper, William. *The Task and Selected Other Poems*. Ed. James Sambrook. Longman Annotated Texts. New York: Longman, 1994.

Dryden, John. *The Poems of John Dryden*. Ed. James Kinsley. 4 vols. Oxford: Clarendon Press, 1958.

——. *The Works of John Dryden*. Ed. E.N. Hooker et al. 20 vols. Berkeley, Los Angeles, and London: U of California P, 1956–2000.

——. *The Letters of John Dryden*. Ed. Charles Ward. Durham: Duke UP, 1942.

Fielding, Henry. *The History of Tom Jones: A Foundling*. Ed. Fredson Bowers. 2 vols. The Wesleyan Edition of the Works of Henry Fielding. Middletown: Wesleyan UP, 1975.

Gay, John. *Poetry and Prose*. Ed. Vinton A. Dearing. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1974.

——. *Dramatic Works*. Ed. John Fuller. 2vols. Oxford: Clarendon Press, 1983.

Goldsmith, Oliver. *Collected Works of Oliver Goldsmith*. Ed. Arthur Friedman. 5 vols. Oxford: Clarendon Press, 1966.

Gregory, John. *A Comparative View of the State and Faculties of Man with Those of the Animal World*. Edinburgh: n.p., 1788.

Gunther, A.E. *The Founders of Science at the British Museum 1753–1900*. Suffolk: The Halesworth Press, 1980.

Hall, Marie Boas. *Promoting Experimental Learning: Experiment and the Royal Society 1660–1727*. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

Henry, John. *The Scientific Revolution and the Origins of Modern Science*. New York: Palgrave, 2002. (邦訳：『一七世紀科学革命』東慎一郎訳　岩波書店 2005年)

Hollingsworth, Cristopher. *Poetics of the Hive: The Insect Metaphor in Literature*. Iowa City: U of Iowa P, 2001.

Jardine, Nicholas, J.A. Secord, and E.C. Spary, eds. *Cultures of Natural History*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.

Johnson, Samuel. *The Lives of the Most Eminent English Poets; With Critical Observations on Their Works*. Ed. Roger Lonsdale. 4 vols. Oxford: Clarendon Press, 2006.

Mandeville, Bernard. *The Fable of the Bees, or Private Vices, Public Benefits*. Ed. F.B. Kaye. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1924.

Nicolson, Marjorie and G.S. Rousseau. *"This Long Disease, My Life": Alexander Pope and the Sciences*. Princeton: Princeton UP, 1968.

Pliny. *Pliny: Natural History*. Trans. H. Rackham, W.H.S. Jones, and D.E. Eichholz. 10 vols. Loeb Classical Library. Cambridge and Massachusetts: Harvard UP; London: William Heinemann, 1956–63.

Pope, Alexander. *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. Gen. ed. John Butt. 11 vols. London: Methuen; New Haven: Yale UP, 1936–69

Ray, John. *The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation*. 1691. Hildesheim and New York: Georg

Olms Verlag, 1974.
Ritvo, Harriet. *The Platypus and the Mermaid and Other Figments of the Classifying Imagination*. Cambridge, Massachusetts, and London: Harvard UP, 1997.
Røstvig, Maren-Sofie. *The Happy Man*. 2 vols. Oslo: Oslo UP, 1954–8.
Scriblerus Club. *Memoirs of the Extraordinary Life, Works, and Discoveries of Martinus Scriblerus*. Ed. Charles Kerby-Miller. New York: Oxford UP, 1988.
Shakespeare, William. *Henry V*. Ed. Gary Taylor. Oxford: Clarendon Press, 1982.
Spence, Joseph. *Observations, Anecdotes, and Characters of Books and Men*. Ed. James M. Osborn. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1966.
Sprat, Thomas. *The History of the Royal Society of London, for the Improving of Natural Knowledge*. 1722. N.p.: Elibron Classics, 2001.
Swift, Jonathan. *The Prose Writings of Jonathan Swift*. Ed. Herbert Davis, Irvin Ehrenpreis, Louis Landa, and Harold Williams. 16 vols. Oxford: Basil Blackwell, 1939–68.
Thomas, Keith. *Man and the Natural World*. New York: Pantheon Books, 1983.
Vergilius, Publius Maro. *Virgil: Eclogues, Georgics, and Aeneid I-VI*. Trans. H. Rushton Fairclough. Loeb Classical Library. Cambridge and Massachusetts: Harvard UP; London: William Heinemann, 1994.
——. *Virgil: the Georgics with John Dryden's Translation*. Ed. Alistair Elliot. Ashington: Mid Northumberland Arts Group, 1981.
Wasserman, Earl R. "Pope: Windsor Forest." *The Subtler Language*. Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1968. 101–168.
福本宰之「『ウィンザーの森』における "to follow Nature" の意義について」(『龍谷紀要』第15巻 第1号、1993年、23–33)